京都市下京区・南区・東山区在宅医療・介護連携支援センター

べんけい通信

vol.1
2025.5

NEWS LETTER　担当：あずみ医院
院長　安住 有史　先生

熱傷について

熱傷について、いくつかのポイントを整理します。

熱傷の深達度分類

熱傷の深達度は、以下のように分類されます：

1. **表皮熱傷（1 度）**
   表皮のみが損傷しており、赤みや軽い腫れが見られます。痛みが強いですが、治癒には数日から 1 週間程度です。
2. **真皮熱傷（2 度）**
   真皮に達する熱傷で、水疱が形成されることがあります。痛みが強く、治癒に数週間かかることがあります。
   2 度熱傷には真皮浅層までの浅達性 2 度熱傷と真皮深層までの深達性 2 度熱傷があり、深達性の場合やや白色を呈し、痛みが軽い場合があります。
3. **皮下組織熱傷（3 度）**
   皮膚全層が損傷され、皮下組織に達する場合です。白く炭化した皮膚や、痛みを感じない場合があります。治療には手術が必要です。

初期対応（深達度にかかわらず共通。ただし化学熱傷は除く）

1. **流水で冷やす**
   熱傷を受けた部位は、まず流水で冷やして熱を逃がすことが大切です。冷却時間は、10 ～ 20 分程度が目安です。冷やすことによって、さらなる組織損傷を防ぎ、痛みを軽減できます。
2. **着衣をぬがす**
   着衣が熱を持っている場合、皮膚に与えるダメージを増加させます。着衣をぬぐ際には、焦って無理に引き剥がさないように注意します。特に、皮膚がくっついている場合、無理に剥がすことで傷が悪化する可能性があるので、慎重に処理します。

発行：京都市下京区・南区・東山区在宅医療・介護連携支援センター
〒 601-8452　京都市南区唐橋堂ノ前町 15-9　エステート南ビル 301
一般社団法人 下京西部医師会内
電話：075-693-8677　FAX：075-693-3677
ホームページ：https://www.ishikai.or.jp/renkei-center/
E-mail shimominami-ikai@ishikai.or.jp

≪ポイント≫ハイドロコロイド剤の使用について

いきなりハイドロコロイド剤（例えばキズパワーパッド）を使用するのは避けるべきです。これらは湿潤環境を提供しますが、初期段階では感染リスクが高く、使用するタイミングには慎重を期す必要があります。

深達度による治療法の違い

- **1 度の熱傷**：基本的には外用薬での治療や冷却が中心です。
- **2 度の熱傷**：水疱を破らず、保護することが重要です。破れた場合は、感染のリスクが増すので、湿潤療法が推奨されます。
  深達性 2 度熱傷の場合は薬剤や外科的処置で壊死部の除去が必要になります。
- **3 度の熱傷**：手術的な治療が必要であり、壊死部の切除や植皮が行われることがあります。

水疱の取り扱い

- **破れていない場合**：細い針で数か所穴をあけて、自然に排液させます。水疱をそのまま残しておくことで、感染を防ぐ効果もあります。
- **破れている場合**：破れた水疱の皮膚が感染源になりやすいため、できるだけ取り除くことが推奨されます。その後、湿潤療法を行い、傷の治癒を促進します。

露出したびらん面の湿潤管理

びらん面（表皮が剥がれて露出した部分）は、乾燥しないよう湿潤環境を保つことが重要です。湿潤療法により創面の治癒が早くなり、感染リスクが低減します。

≪ポイント≫ステロイド外用剤の使用タイミング

ステロイド外用剤は炎症を抑えるために使用されますが、熱傷の場合は炎症反応が治癒過程の一部であるため、使用には慎重を期する必要があります。特に、深度の深い熱傷や壊死の兆候が見られる場合、医師の指示が必要です。

低温熱傷

- **原　因**：こたつ、湯たんぽ、ファンヒーターなどが主な原因となりますが、使い捨てカイロやその他の加熱物による低温熱傷もあります。
- **リスク**：泥酔した人や睡眠導入剤を使用している人など、感覚が鈍い人は特にリスクが高いです。糖尿病で末梢神経障害のある方もハイリスクです。

壊死部の判断と切除

壊死が進行すると、その部位は血流が失われ、感染しやすくなります。壊死部がはっきり見える場合には、早期に切除を行い、感染の拡大を防ぎます。ただし、壊死の判断には時間がかかることがあり、観察を慎重に行うことが重要です。

いずれにしても火傷した場合にはできるだけ早く皮膚科や外科に受診することをお勧めします。